

16～18世紀越南におけるにおける後期黎朝(鄭氏) と広南阮氏の暦と日食記事について

Luni-solar Calendars and Solar Eclipse Records of Trịnh Lords (Lê dynasty) and Nguyễn Lords (in Cochinchina) in 16—18th Century Vietnam

岡崎 彰 (元群馬大学)

Akira OKAZAKI, Gunma University

Abstract. We discuss the cause of a serious difference in the reliability of solar eclipse records between *Đại Việt Sử Ký Toàn Thư* (TT, 大越史記全書) and *Đại Nam Thực Lục* (DNTL, 大南寔録) for the overlapping period covered by both of these Vietnamese historical sources. During this period, or from late 16th century through late 18th century, TT describes the history of the Lê dynasty controlled by the Trịnh Lords, while DNTL mentions that of the Nguyễn Lords in Cochinchina. In our previous study presented at last meeting and given again here as sections 2 and 3, we showed that, among 29 records in DNTL, 20 records are incorrect and 16 of them are in a serious error giving wrong lunar months while, among 32 records in TT, 9 records are incorrect and 4 of them are in a serious error. We also pointed out that all the incorrect records in DNTL fall into the period from late-1660s to early-1720s, where only one of 21 records (5%) in DNTL is reliable while 7 of 11 records (64%) in TT are reliable. In the present study, we demonstrate that the period when Nguyễn Lords' calendar (used in DNTL) is largely different from Trịnh Lords' one (used in TT) approximately coincide with the above period from late-1660s to early-1720s. We also found that there seems no significant difference in the reliability of comet appearance records, which should be free from calendar calculation, between in TT and DNTL. Our conclusion is that most of the solar eclipse records in DNTL are predictions based on calendar calculation and also that Nguyễn Lords' calendar called *Vạn Toàn Lịch* (萬全曆) had been improperly calculated from late-1660s to early-1720s, which should have caused the errors in their solar eclipse prediction.

1. はじめに

ベトナムでは16世紀から18世紀後半にかけての後期黎朝の時期、黎朝の再興に関わった鄭氏と阮氏のうち、鄭氏が王朝の実権を握り、現ハノイを拠点としてベトナム北部の実質的に統治していた。一方、事実上追放される形で地方長官としてベトナム南部(現ベトナムの中部・南部)に赴任した阮氏は、現フエを拠点に周辺地域で権力を固めて半独立国(広南国)を形成していた。皇帝を擁する鄭氏と南部を支配する阮氏の2つの政権は長らく対立することになり、何度も戦火を交えることになった。

鄭氏が実権を握る後期黎朝では正史を編纂し、当然のことながら暦計算も行っていた。一方、阮氏の広南国では、表面上は後期黎朝に従って独自の皇帝や年号を用いることはなかったが、暦計算は独自に行っていたことが知られている。広南国の歴史は、阮氏の後裔がのちに興した阮朝の正史の前編に収められている。

当時の暦はいわゆる太陰太陽暦であり、暦の計算に基づいて得られる日食の予報は、使用している暦の精度を調べる上で重要なものであった。ベトナム史書の日食記事の大半は「日

食」または「日有食之」という簡単な記述しかなく、実際に観測されたものなのか、あるいは暦計算で予測されたものなのかを区別することは難しい。一方で、たとえば、斉藤・小沢 (1992) は、中国古代の史書における日食・月食記事の大部分は暦計算による予測を記したものだとの見方を示している。

本研究の目的は、この時期の鄭氏政権（後期黎朝）と阮氏政権（広南国）の史書に記された日食記事を比較し、併せて、両政権の暦、さらに両史書の彗星出現記事をそれぞれ比較して、これらに基づいて「ベトナムの史書における日食記事は観測結果なのか、それとも暦計算の結果なのか」についての考察を試みるものである。

今回の発表は「第4回天文学史研究会」での発表内容（詳細は、岡崎・田野倉, 2012）の続きをなすものである。以下では、本稿だけで話が完結するように、第2節と第3節の殆どは前回の集録内容と重複したものになっているが、その後の調査に基づいて若干の改訂がなされていることをお断りしておく。

2. 両政権の史書と暦

2.1 「大越史記全書」と「大南寔録」

「大越史記全書 (*Đại Việt Sử Ký Toàn Thư*)」は、後期黎朝までのベトナム歴代王朝の正式な史書である。呉士連の編纂による太古から 967 年までを収めた外紀五巻および 968～1427 年を記した本紀全書、編纂者不詳の 1428～1532 年の記事を収めた本紀実録、范公著が編んだ 1533～1662 年を記した本紀続編、さらに黎僖が編纂した 1663～1675 年の記事を収めた本紀続編追加、の全二十五巻の構成となっている。これに加えて、さらに上記の続編ともいうべき 1676 年から 1789 年までを扱った「大越史記続編」なる史書があり、これも合わせると、全二十九巻の構成となっている（陳 1977）。後期黎朝時代には、大越史記全書は実質的に鄭氏政権によって編纂されたとみられる。本研究では、陳 (1984–86) による「校合本 大越史記全書（上・中・下）」を用いた。

一方、「大南寔録 (*Đại Việt Sử Ký Toàn Thư*)」は、ベトナム最後の王朝である阮朝欽定の史書であり、全 548 巻から成っている。記述年代は、16 世紀中頃の後期黎朝の阮氏の時代から 20 世紀前半の啓定帝の時代に及ぶ。1811 年の嗣徳帝の詔によって編纂が始められたもので、寔録（本紀に相当）と列伝から成る。ともに前編と正編に分かれているが、前者は阮潢が阮氏政権の統領となった 1558 年から阮福映（嘉隆帝）が統領となったとされる前年の 1777 年（嘉隆帝として阮朝を興す 25 年前）までを扱っている。前編は広南国時代の阮氏政権の状況を知るための貴重な史料であるが、1777 年に阮氏政権が滅亡して多くの原史料が散逸したであろうことを考慮すると、阮朝の時代を主に扱った正編と比べて精度が劣る可能性は否めない。本研究では、慶應義塾大学語学研究所 (1961) による「大南寔録一 大南寔録前編、大南列傳前編」を用いた。

2.2 「欽授暦」と「萬全暦」

Hoàng Xuân Hãn (1982) によると、後期黎朝（鄭氏）の「欽授暦」は、中国暦と同じ暦法（「授時暦」・「大統暦」）を使用していたが、計算はベトナムで独自に行っていたという。また、17 世紀中頃に清が「時憲暦」を採用したとき、ベトナムでは引き続き従来と同じ暦法を維持したため、中国の暦と食い違うようになったが、19 世紀前半に阮朝が「時憲暦」と同じ暦法を採用してから食い違いがなくなったという。その一方で、広南国の阮氏の暦については、史料がないため詳しいことは不明とした。

その後、Lê Thành Lân (2003, 2007) は、ベトナムで中国と同じ暦法が採用されていたとされ

る 1544 年～1643 年の 100 年間にも、「欽授暦」と中国暦との食い違いが 12 ヶ所 (11 朔日 1 閏月) あることを指摘した。さらに、Lê Thành Lân (2003, 2007) は広南国 (阮氏) の「萬全暦」の史料を発掘し、同暦が後期黎朝 (鄭氏) の「欽授暦」といくらか異なっているが、その相違は中国暦との違いよりも小さいと指摘している。

Lê Thành Lân (2007) は、発掘史料に基づいて再現した 1544 年以降のベトナム暦と中国暦と西暦 (グレゴリオ暦) との対照表を出版した。以下で述べる本研究の対象期間 (1587～1774 年) については、1587～1630 年は「欽授暦」、中国暦 (「大統暦」または「時憲暦」)、西暦の 3 つの暦の対照表、1631～1774 年は「欽授暦」、「萬全暦」、中国暦 (「時憲暦」)、西暦の 4 つの暦の対照表となっている。

3. 両史書の日食記事の比較

「大南寔録」と「大越史記全書」の記載年の重なる時期の日食記事 (1587～1774 年) を対象にして、その年月日のそれぞれフエとハノイでの日食の見え方について両史書の記事内容を比較する。比較対象は、「大南寔録」の日食記事 29 件 (岡崎・田野倉, 2012) と「大越史記全書」の日食記事 32 件 (田野倉・岡崎, 2011) である。日食計算による再現としては、ここでは Espenak and Meeus (2006) の日食表を用いた。この日食表との比較に必要な日付の西暦への換算には、Lê Thành Lân (2007) の暦の対照表を用いた。阮氏の「萬全暦」の暦資料が残されていない 1587～1630 年の時期にも「大南寔録」には 4 件の日食記事がある。いずれも

「大越史記全書」にも記載されているものと同じ日食であり、両史書で同一年月日を与えていることから、少なくとも日食の起きた日については「萬全暦」と「欽授暦」とで食い違いがないことが確認できる。

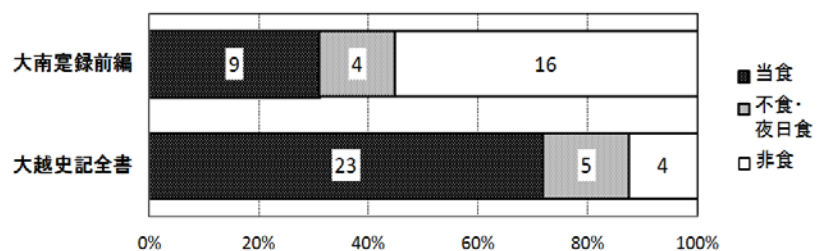


図 1 「大南寔録前編」と「大越史記全書」における 1587～1774 年の日食記事の内訳

調査の結果、「大越史記全

書」では全 32 件のうち、当食が 23 件 (72%)、不食・夜日食が 5 件 (16%)、非食が 4 件 (12%) であったのに対して、「大南寔録前編」では全 29 件のうち、当食が 9 件 (31%)、不食・夜日食が 4 件 (14%)、非食が 16 件 (55%) であった (図 1)。このように、両史書の記載が重なる時期には、「大南寔録前編」の日食記事が「大越史記全書」と比べて当食の比率が著しく低いだけでなく、当食でない場合の内訳も非食の割合が極端に高いことが確認された。

図 2 は、両史書に記載された個々の日食記事の見え方を、横軸を西暦年、縦軸を記載された年月日と計算上の年月日とのずれ (朔望月単位) として表したグラフである。このグラフでは非食以外はすべて基準軸上にブ

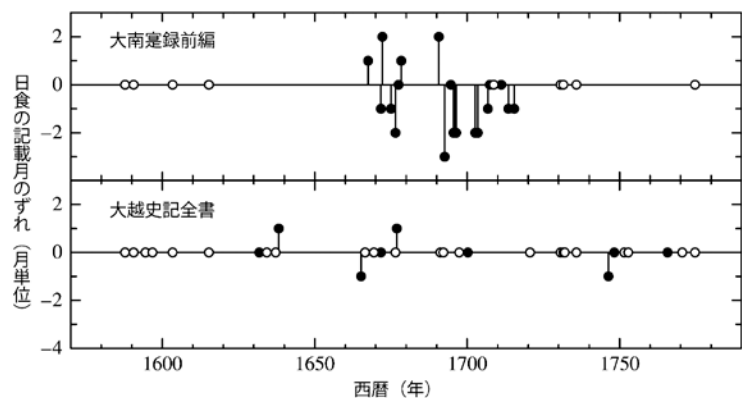


図 2 「大南寔録前編」と「大越史記全書」における日食記事の記載時期と信頼度。基準軸上の○と●はそれぞれ「当食」と「不食・夜日食」。基準軸から上下に外れた●は「非食」で、縦線の長さは記載されている暦月と実際に日食の起きた暦月とのずれを表す。

ロットされる。このグラフからわかるように、「大越史記全書」の非食4件はいずれも前後1朔望月のずれであり、記載時期もランダムに分布しているのに対して、「大南寔録前編」の非食16件は前3～後3朔望月の範囲に及び、その記載時期も1660年代後半～1720年代前半までの数十年間に集中している。しかも、不食・夜日食4件もすべて同じ時期に集中しており、この時期の日食記事21件に限って言えば、当食はわずか1件（5%）にすぎない。

4. 考察

非食も不食・夜日食も当地で日食が見られないという点では同じであるが、暦法計算による日食予測という立場から言えば、日食の起きる年月日を朔望月単位で外しているという点で、非食は不食・夜日食よりも深刻な誤りである。また、地球上では日食が概ね6朔望月ごとに繰り返されているので、非食のずれが前3～後3朔望月の範囲に及ぶということは、実際の日食が起きた月とは関係なく無秩序に分布していることを意味する。このように考えると、「大南寔録前編」の日食記事で1660年代後半～1720年代前半までの数十年間に多くのこのような非食が集中しているという事実は、特異な状況と言わざるを得ない。

この主な原因として、次の2つが考えられる。第1に、それなりに信頼度の高かった原史料の日食記事の内容（観測か予測かは問わない）が何らかの理由で正しく伝わらなかった可能性である。阮氏政権が18世紀後半に滅びた際、原史料の多くが散逸してしまい、阮朝が「大南寔録前編」を編纂することになった19世紀前半には、上記時期の信頼度の高い原史料がほとんど残されなかったという見方が考えられる。

第2に、日食記事は暦計算による予測を記したものだとして、当時の阮氏による暦計算の粗雑さを反映している可能性である。前述のように、当時の中国史書の日食記事の多くは実際に観測されたものではなく、暦計算で予測されたものとの指摘がある。もしこの指摘がベトナム史書にも適用できるとすれば、この時期の阮氏による暦計算に何らかの問題があったという見方が考えられる。

以下では、この時期に両政権で使われていた暦を比較し、さらに両史書に収められている彗星記事を比較して、上記の2つの見方のどちらが妥当といえるかを考察する。

4.1 萬全暦と欽授暦との相違

前にも述べたとおり、Lê Thành Lân (2003, 2007) は、広南国（阮氏）の萬全暦と後期黎朝（鄭氏）の欽授暦とはいくらか異なっているが、その相違は中国暦との違いよりも小さいと指摘している。具体的には、比較可能な1631～1788年の158年間で11閏月と36朔日の相違が両暦の間にあると述べている。

しかし、著者がLê Thành Lân (2007) の暦の対照表に当たってみたところ、実際に確認できたのは10閏月と36朔日の相違であった。そのうち1朔日を除くすべての相違が1725年以前に起きていることがわかった。一方、比較可能な期間のうち欽授暦と同じ暦法（大統暦）が中国で用いられた期間（1631～1644年の14年間）でそれぞれを中国の暦と比較すると、欽授暦で

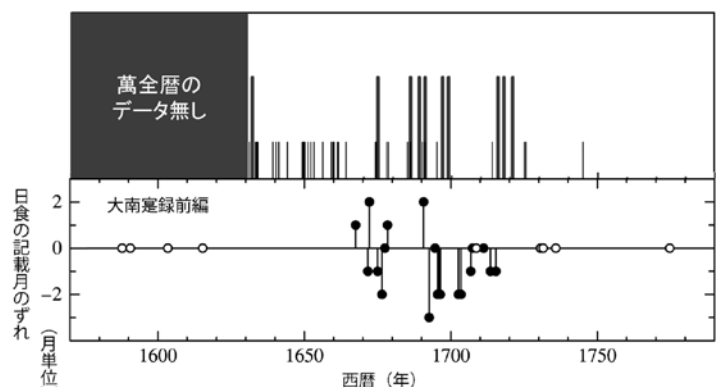


図3 萬全暦と欽授暦との相違（上段）。長い縦棒は閏月の相違、短い縦棒は朔日の相違を示す。下段は図2の上段と同じ。

は1朔日の相違にすぎないが、萬全曆では1閏月と10朔日もの相違があった。広南国（阮氏）の萬全曆の暦法は定かではないが、最も優れた太陰太陽曆とされる授時曆・大統曆と比べてこれほど大きな食い違いがあることは、少なくともこの時期の萬全曆の暦計算に問題があったことを強く示唆している。一方、後期黎朝（鄭氏）の欽授曆の暦計算は若干の問題があったとはいえ、比較的順当に行われていたとみなすことができる。したがって、欽授曆と萬全曆の食い違いは、ほとんどが後者に問題のある場合と考えてよいであろう。

ここで改めて両曆の相違の時間分布を見てみると（図3）、閏月の相違は1675～1721年に集中しているが、この時期は「大南寔録前編」で非食の日食記事が集中しているときとほぼ重なる。暦計算では閏月の誤りの方が朔日の誤りよりも深刻であることを考えると、図3に示された結果は、上記の第2の見方、すなわち阮氏による萬全曆の暦計算に問題があったために日食の予測に誤りが生じたという見方を支持しているといえよう。

4.2 両史書における彗星記事の比較

彗星の出現は、日食や月食と異なり、当時の人々にとっては全く予測できない突発の天文現象であった。それ故、史書に記載された彗星記事は実際に観測されたものである。

「大南寔録前編」の非食の日食記事が特定の時期に集中する原因として、原史料の多くが散逸したとする第1の見方が正しいとすれば、彗星記事も日食記事と同じ時期に極端に信頼度の低いものが集中するであろう。それに対して、萬全曆の計算に問題があったとする第2の見方が正しいとすれば、彗星記事は日食記事と違ってどの時期でも信頼度に大きな違いはないであろう。

以上の立場から彗星記事の信頼度を調べようとするとき、この信頼度をどのような方法で評価するかが大きな問題となる。というのは、彗星の出現は、公転軌道が確定している少数の周期彗星を除けば、日食・月食とは違って天体力学を用いても当時の状況を再現できないからである。そのため、ここでは便宜上、ベトナムと同じようなやり方で天文現象を記録していた中国、朝鮮、日本の史料の彗星記事（白気記事も含む）と比較して、出現月が一致の場合は「信頼できる」、±1ヵ月のずれは「やや信頼できる（重み0.5）」として評価することにした。±1ヵ月のずれを許容したのは、月末の頃に出現して翌月に跨って見えることがあったり、場合によっては各国の暦法による閏月の挿入位置の違いで同じ暦月の呼称が1ヶ月異なることがあったりするからである。中国の彗星記事については北京天文台（1988）主編の「中国古代天象記録総集」を、また、朝鮮については関口（1917）、日本については大崎（1917）、渡辺（2007）によるカタログや天文史料を参照した。

表1は、「大南寔録前編」の非食の日食記事が集中する時期とほぼ同じ1668～1723年の時期の彗星記事について、上記のようにして得られた信頼度の結果を示す。比較のために日食記事についても下段に掲げた。「信頼記事の数」が必ずしも整数になっていないのは、上記のように「やや信頼できる」記事が含まれているからである。

表1 1660年代後半～1720年代前半における両史書の彗星記事（上段）と日食記事（下段）の信頼度

天文記事	政権	史書	記事の数	信頼記事の数	信頼度(%)
彗星	鄭氏	大越史記全書	8	5.5	69
	阮氏	大南寔録前編	4	2.5	63
日食	鄭氏	大越史記全書	11	7	64
	阮氏	大南寔録前編	21	1	5

彗星記事については、記事の数が少なく統計的に有意な判定が下せないのが確定的なことは言えないが、得られた数字を見る限り両史書で信頼度に際立った違いは見られない。一方、

日食記事に関しては、両史書で信頼度が極端に異なっている。実際、フィッシャーの直接確率検定を適用すると、両史書の記事の信頼度には 5%の有意水準で違いが認められた。

このように、表 1 に示された結果だけでは彗星記事の数が少ないために確定的なことは言えないが、少なくとも、上記の第 2 の見方、すなわち阮氏による萬全暦の暦計算に問題があったために日食の予測に誤りが生じたという見方と矛盾するものにはなっていない。

5. 結論

以上の考察から本研究の結論として、「大南寔録前編」の日食記事は当時の阮氏政権による暦（萬全暦）計算による予測を記載したものであり、1660年代後半～1720年代前半の時期に非食の日食記事が多いのは、何らかの理由で暦計算がその頃に正しく行われていなかったことを反映しているものとみられる。

参考文献

- Espenak, F., and Meeus, J. 2006, “Five Millennium Canon of Solar Eclipses: -1999 to +3000”, NASA Technical Publication TP-2006-214141
- Hoàng Xuân Hãn 1982, *Lịch và Lịch Việt Nam*, Phụ trương Tập san Khoa học xã hội, Paris
- Lê Thành Lân 2003, *Vietnamese Old-Time Calendars*, SEACOM Studien zur Südost-asienkunde, Bd.6, pp.7–19
- Lê Thành Lân 2007, *Đối chiếu lịch Dương với lịch Âm-Dương của Việt Nam và Trung Quốc 2030 năm (0001 – 2030)*, NXB Giáo Dục, Hà Nội
- 大崎正次 1994, 「近世日本天文史料」(原書房, 東京)
- 岡崎 彰・田野倉瑞穂 2012, 「『大南寔録前編』における日食記事」, 群馬大学教育学部紀要 自然科学編, 第 60 巻, 27–32 頁
- 慶應義塾大学語学研究所 1961, 「大南寔録一 大南寔録前編, 大南列傳前編」, (慶應義塾大学語学研究所, 東京)
- 斉藤国治・小沢賢二 1992, 「中国古代の天文記録の検証」(雄山閣出版, 東京)
- 関口鮎吉 1917, 「朝鮮李朝古記録中の彗星」, 天文月報, 第 10 巻, 85–88 頁, 99–103 頁
- 田野倉瑞穂・岡崎 彰 2011, 「ベトナム史書における日食と月食の記事について」, 群馬大学教育学部紀要 自然科学編 第 59 巻 45—54 頁
- 陳 荊和 1977, 「大越史記全書の撰修と伝本」, 東南アジア — 歴史と文化 —, No.7, 3–36 頁
- 陳 荊和 1984–86 年, 「校合本 大越史記全書(上・中・下)」, 東洋学文献センター叢刊 第 42, 44, 47 輯, (東京大学東洋文化研究所, 東京)
- 北京天文台 1988, 「中国古代天象記録総集」(江蘇科学技術出版社, 南京)
- 渡辺美和 2007, 「続 近世日本天文史料 暫定版 ver.1.0」(非売品)